

---

# IS ~ インフィニットストラトス ~ 黒騎士は織斑一夏

AST

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS〈インフィニットストラトス〉黒騎士は織斑一夏

### 【Nコード】

N7189X

### 【作者名】

A S T

### 【あらすじ】

変態腐れニート神との決戦で彗星に押し流されたマキナは、偶然にも円環から弾き出されてしまう  
気が付けば、彼は織斑一夏として未知の世界に生まれていた。  
この小説は一夏がマキナだったらカッコ良くな？という妄想から生まれた駄文ですので期待しないでください

## 第一話（前書き）

とうとう書いてしまった連載小説  
どこまでいけるか分かりませんが  
不安だらけのこの作品にお付き合いいただけるのでしたらお願いします。

## 第一話

ギロチンの刃に自分の首を飛ばされ敗北しながらも、やっと自分の名を思い出せた事

自分を創り出した腐れニート神との決戦で流星に押し流された自分の体が何処かへと墜ちてゆく浮遊感

ずっと墜ち続けた自分が新しく生まれ落ちた瞬間の光

「この子の名前は

」

## 第一話

織斑一夏は前世の記憶というものがある。

否、気づいたら新しく生まれ変わっていたという表現が正しいだろう  
前世の彼であったのなら即座に死を望み、座に存在する変態ニート  
神を呪っていただろう

だが、この身は前の様に死んだ身の姿では無く

織斑一夏という人間の肉体であり前世の姿では無い  
かつてマキナと呼ばれ、本当の名をミハエルと呼ばれた彼の前世は  
やっと死ぬ事が出来たと言う事だ。

ならば自分は織斑一夏としての人生を生きてゆこうと決意した。

まあ、ここまでは良かった。

軍事転用された宇宙用マルチフォーム・スーツ、インフィニット・  
ストラトス、通称IS

篠ノ之束によって開発され、女性しか起動できないと言う欠点の為に女尊男卑の社会を生み出した。

現在はスポーツとしての形で落ち着いている。

そして国連によって造られたISの操縦者を育成する学園、IS学園

「何故、俺はここに居る・・・？」

そう呟き、周囲を見回す。

かつて小学生のころに分かれ、和風美人となった幼馴染に目をやる  
と目を逸らされた。

本来、男である筈の一夏がここに居るのは、受験会場を間違え、偶然ISに触れたら起動してしまっただからだ。

クラスメイトは全員女子、この状況を悪友の五反田弾に言ったら  
それ何てギャルゲー？と心底羨ましそうな視線を浴びせながら言っ  
たのを覚えている。

その時は「そうか・・・」と素っ気無く返したただだったが、  
この気まずさと居心地の悪さの中で新しい人生の青春時代を過ごす  
のかと考えると

今なら言える。

今すぐ代わってくれ！と

「———くん、織斑一夏くん」

「む・・・？」

気が付けばクラスの副担任である山田真耶が自分の名前を呼んでい  
た。

「あ、あの、大声出しちゃって、ごめんなさい。あの、お、怒って  
る？怒ってるかな？」

ゴメンね、ゴメンね！で、でも自己紹介、『あ』から始まって今『

お』なの・・・

だから、織斑君の番なんだよね、だからね、ご、ゴメンね？自己紹  
介してくれるかな？」

ダメ？と涙目になっている山田先生を落ち着けてから自己紹介をす  
る事にした。

「・・・落ち着け」

「は、はい！」

ぶっきらぼうな一言の筈なのに

何故か年上の男性に優しく言われた様に感じた山田真耶は頬を紅く染めながら答えた。

自己紹介をするべく一夏は席から立ち上がった。

「織斑一夏だ。・・・よろしく頼む」

彼の自己紹介終了

「えっと・・・以上ですか・・・？」

「これ以上、言葉で語る意味は無い」

キーン！！

多分、クラス中にそういう擬音が聞こえた気がする。

これが普通の男子なら単なる格好付けだと思われるだろう

しかし、一夏の多くを語らない寡黙な大人の男を感じさせる所

所謂ハードボイルドな男の雰囲気は漂っていた。

クラスの女子たちは自分達と同年代である筈なのに、

はるかに一回りも二回りも年上の大人であるかのように感じさせる

一夏にときめきを覚えた。(個人差はあるが)

「お前がそういう性格なのは分かっていたが、自己紹介としてそれはどうなんだ？」

その言葉と共に教室に入ってきたのは、

一夏にとって唯一無二に家族にして、幼い自分を学生の身でありながらも必死に自分を養ってくれた大恩ある実の姉

世界一のIS操縦者と名高い織斑千冬であった。

彼女の頬がやや赤く染まっているのはどうしてだろうか？

「すまないな、山田君。挨拶を押し付けてしまって・・・」

「いえ、これ位の事は・・・」

取り敢えず座る一夏

「全く・・・お前はもう少しマトモな自己紹介は出来ないのか？」

「・・・姉さん」

スパアン！と出席簿で頭を叩かれた。

「ここでは織斑先生と呼べ、いいな？」

「・・・分かりました。織斑先生」

その後、すぐにクラスのミーハーな女子達が騒ぎ出したりしたが、一夏は我関せずと言った様子で居たのだった。

## 第二話（前書き）

続きです。

素人の駄文を読んでもくださり、ありがとうございます。



## 第二話

授業が終わり少しの間の自由時間となった。

一夏はひたすらに腕を組んで目を閉じていた。

彼の周囲にいる女子達は話しかけたい様だが、良くある誰が話しかけるかで言い合っていた。

すると彼女達とは別の女子が一夏に話しかけた。

「ちよつといいか？」

閉じていた眼を開けて声の主の方を見る。

「・・・ああ」

短い返事を返し、席から立ち上がる。

「ここは人が多い、屋上で話そう」

教室の至る所から残念そうな声が聞こえたが、一夏は気にする事も無く彼女に連れられて行く

## 第二話

人気の無い一年校舎の屋上で一夏は久しぶりに再会した幼馴染と二人きりでした。

「久しぶりだな、篝。六年振りか」

「ああ、お前も相変わらず無口なままだな」

「・・・饒舌な方が良かったか？」

「いや、それはそれで何か気持ち悪い」

「・・・随分な言い様だな」

少しムツとした感情が声にも伝わる。

どうやら一夏の感情は顔で無く、声に出るらしい

「・・・まあ良い、教室で一目見てお前だと分かった。」

「そ、そうか？」

「髪型、眼、雰囲気・・・こんな所か」

箒は顔を照れくさそうに自分の髪の毛を弄っている。

一夏は彼女との記憶を思い返していた。

自分の拳は強すぎた。

だから彼女の実家である神社の道場で剣道を学び始めた。

そこで共に剣を学び高めあった幼馴染

姉妹揃って人付き合いが苦手で両親が悩んでいた事も思い出せる。

最初の頃はお互いに交わす言葉は少なく、素っ気ない会話ばかりだった。

まともな会話をする様になったのは彼女が男女と馬鹿にされ、イジメを受けていたのを助けた時からか

馬鹿にされている彼女を抱き寄せ、ただ相手に向かって一言

「黙れ」

それだけで彼女にイジメをする者はいなくなった。

子供なら気絶する寸前の殺気をぶつけたのだから当たり前である。

ちなみに一夏は気づいていないが、この時の箒の一夏を見る眼は王子様を見る眼だったらしい

それから一夏は箒を抱き寄せて胸の中でひとしきり泣かせた後に元気づける為に彼女の額にキスをした。

これは精神が子供の扱いに慣れていない独り身のオッサンである一夏が、胸で泣いている箒をどう元気づけようか必死に考えていると

唐突に前世で唯一の子持ち（親父として色々ダメな美丈夫は除外）で子育て経験のある同僚ならどうするかと思いついた結果である。

効果は抜群だった。むしろ抜群すぎた。

何故なら、その直後に同僚だった白騎士の如く神速の速さで走り出したのだから

その時の感想は

「・・・どうやら元気になった様だな。感謝するぞ、バビロン」

何処かで困った様に苦笑しながら“やっぱり兄弟かしらね？”と自分が育てた曾孫に言うFカップの巨乳美女が居たとか何とか・・・そろそろチャイムが鳴る頃だろうと思った一夏は過去の思い出から帰還して箒に言った。

「話したい事はまだ有るだろうが、そろそろ鐘が鳴る頃だ、戻るぞ。」

「

「そう・・・だな」

少し残念そうな表情になる箒を見て一夏はやれやれと言った様子で溜息を吐くと

「・・・箒」

彼女に急接近し

「なッ、ななな何だ？」

箒の頬が赤く染まるのにも構わずに

「綺麗になつたな」

そう言つて昔の様に額にキスをした。

「~~~~~!!!!!!」

「??????」

箒は顔がものすごい勢いで真っ赤に染まり、ぶしゅゅゅと蒸気を出し

まるで蒸気機関車の如く、猛スピードで教室にすっ飛んで行った。

「・・・熱でもあつたのか？」

当の本人だけが何も分かつていなかった。

“やっぱ、罪造りな男だよね。あのマキナがあんな事するなんて思わなかつたけど、流石は藤井君のお兄さんって思えるよね？”

と、また何処かで、好意を抱く自分の後輩を弄るクォーターの少女が居たとか何とか・・・

その後、授業に無事、間に合った二人であったが、篝の方は顔を真っ赤にしながらもどこかニヤけており

千冬は、またコイツかと言いたげな表情で一夏を見ていたのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

当の本人はやっぱり気づいて無かった。

## 第二話（後書き）

なんかマキナがキャラ崩壊を起こしている気がしなくも無い  
リザさんと玲愛先輩は完全な傍観者の場所にいます。

直接、話に関わることはありません。  
多分ね

### 第三話（前書き）

今回、マキナー夏を喋らせ過ぎた。

キャラが崩壊している様な気もつとしてきたぞ？

・・・やっべえ、お気に入り登録している人が意外と多いぞ  
プレッシャーは無い（キリッ）と言いたいけど・・・

・・・うん、やっぱり無理

## 第三話

「~~~~であるからしてISの基本的な運用は~~~~」

一夏が箒と教室に戻ってきてから、現在二限目の授業を受けている。相変わらず一夏は無表情で教科書を見ていた。

箒の方はぶしゅくと顔を真っ赤にしながらも何とか授業を受けている。

流石にその様子を不審に思ったのか

「えっと・・篠ノ之さん？」

「は、はいッ!？」

「随分と熱っぽそうに見えますけど大丈夫ですか？」

「も、ももも、勿論です!大丈夫です!」

物凄い動揺しながらも答える箒

その様子にクラスメイト達の乙女センサーは教室に戻ってきた様子やそれからのニヤケ顔と蒸気噴射から、休み時間に絶対何かあった!

と確信するのだった。

「ちょっとよろしくて?」

「・・・む?」

二限目の休み時間、今度は金髪縦ロールのお嬢様が一夏に話しかけた。

「なんですの! そのお返事。私に話しかけられるのも光栄なのですから

それ、相応の態度と言う物があるのでは無いかしら?」

それを聞いた一夏は即座に脳内情報を検索、該当する人物を探し当てる。

「英国の代表候補生か・・・」

「その通りですわ。名前まで覚えていらっしやらないのは、如何なのかしら?」

「覚えていない訳では無い。セシリア・オルコット」

ジロリとセシリアを見ると、ぶつきらぼうに言う

「何の用だ?」

「まあ! 何て物言いでしょう!? 本来、私の様な選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡なのですわよ? その辺りをお分かり頂けるかしら?」

「そうか・・・幸運だ。」

「馬鹿にしているのですか! ?」

喰ってかかるセシリアと我興味無しと言った様子の一夏

まるで構って欲しい犬が吠えてくるのを適当に相手する飼い主にも見えなくない

「ふ、ふん! まあ、よろしいですわ。何か分からない事が有ったら泣いて頼まれるのでしたら、教えて差し上げてもよろしくてよ!

何せ、私は入試で唯一教官を倒したエリートなのですから! !」

ある程度落ち着いたセシリアが偉そうに言うが

「俺も倒した。」

「・・・・・・は?」

セシリアだけで無く、会話を遠巻きに見ていたクラスメイト達まで



呆けた声を上げた。

「わ、私だけと聞きましたか!？」

「女子では、な」

「で、では、私だけでなく貴方も倒したと言うのですか!」

「ああ」

「どうやって!？」

ガアツと再び食って掛かるセシリア

教官を倒したと言う事に興味深そうに眼をキラキラ輝かせているク

ラスメイト達

彼女らに説明するように一夏は語る。

「突撃したら、向こうの方も突撃してきた。」

「それで?」

「懐に入った。」

「そして近接武器を使って倒したと?」

「頭掴んで地面に叩きつけた。」

「……………ひどっ!!!」「……………」

実際、相手になった真耶は凄まじい速度で地面に叩きつけられた衝

撃で気絶

そのまま追撃してもう一方の拳を叩き込もうとしたら

ブザーが鳴って試験が終了した。

まさか高空から地面に顔面を叩きつけられるなんて経験したのは

彼女が初めてだろう

意識を取り戻した真耶はその時の記憶が飛んでいたらしい

おそらく精神の安定を図るために脳が記憶から消去したのだろう

その後、千冬に“お前は教官を潰す気か!”と怒鳴られた。

すると、チャイムが鳴りだした。

「ッ!…っ、続きはまた後ですわ!」

セシリアは捨て台詞を吐くと自分の席に戻ってゆく

三限目の授業を終え、今は四限目の授業だ。

「これから再来週行われるクラス対抗戦に出るクラス代表を決める。クラス代表者とは、そのままの意味だ。対抗戦だけで無く、生徒会の会議や委員会にも出席する。まあ、クラス長の様なものだ。クラス対抗戦とは入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差は無いが競争は向上心を生む。一度決まれば余程のことが無い限りは一年間変更は無い。その点を踏まえておけ」

教壇に立った千冬が全員に言い放つ

いつも通りの一夏は興味が無いとばかりに腕を組んで千冬を見ている。

「はいっ！織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！！」

クラスメイトが次々と一夏を推薦する。

「では、候補者は織斑一夏・他にはいないか？自他推薦は問わないぞ？」

それに反論する声が上がった。

「待って下さい！納得がいきませんわ！！」

机を叩きながらセシリアが立ち上がる。

「そのような選出は認められません！！大体、クラスの代表が男だなんて言い恥さらしですわ！！私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと言うのですか！？」

更にセシリアは捲し立てる。

「実力で言えば、私がクラス代表になるのは必然！それを珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！！大体、文化も後進的な国で暮らすこと自体私にとっては苦痛でしか——「下らん」何ですって？」

一夏の言葉の端々には怒りの感情が感じられた。

「下らんと言った。クラス代表になるのであれば、国家の代表候補生ならば

他国を国を侮辱する言動は慎め、英国には礼儀と言う物が無いのか

？」

普段寡黙な一夏がここまで喋るのは結構怒っていると云う事だ。

「なっ、私の祖国を侮辱しますの!？」

「先に侮辱したのは貴様だ。英国人<sup>ライミー</sup>」

イギリス人への侮辱の言葉を言われたセシリアは

「決闘ですわ!！」

「良いだろう」

前世で黒騎士と呼ばれた男に挑戦状を叩き付けた。

「もし私が勝つたら小間使い!いいえ、奴隷にして差し上げますわ

!！」

「俺が勝つた場合はどうするつもりだ？」

「そんな事、万が一にもあり得ませんわ!

もし貴方が勝つたら奴隷でも何でもなつて差し上げますわ!！」

まあ、そんな事あり得ませんが!と云うセシリアに一夏は問う

「手加減はどうする?」

「あら、早速お願いかしら?」

「違う、俺の手加減だ。」

するとクラス的女子が一斉に笑い出す。

「織斑君、それ本気で言ってるの?」

「男が女より強かったのつて大分昔の話だよ?」

口々に言うクラスメイトが言うが、下らなさそうに一夏は語る。

「それは女がISを使えるからだ。女が男に対しての絶対的優位性を持つISを

男の俺が使える。それがどういう意味か分かるか?」

その言葉にクラス中が押し黙る。

「それにIS以外の肉体的要素は男の方が上だ。学力は本人次第で如何にでもなる。」

つまり、と一夏は続ける。

「ISが使える事以外で男女に差は無い」

俗物共の政策で女尊男卑の社会が作られただけだ。

と見事に政治家を敵に回す発言を一夏はした。

「話が逸れたな・・・尤も、俺と貴様に経験による差があるのは否めん。」

だが、決闘に手加減を加えるのも誇りに反するか・・・」

一夏はそう言ってセシリアを見据える。

「良いでしょう！私の誇りに掛けて貴方を全力で倒して差し上げますわ」

その言葉に一夏は僅かにニヤリと笑った。

それに気づいたのは筈と千冬の二人だけであったが・・・

「さて、話は纏まったな。勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う」

織斑とオルコットはそれぞれ用意しておくように」

千冬がそう言って纏めると、授業が始まったのだった。

### 第三話（後書き）

さっさと原作買って読まない和不味いな・・  
金使いたくないから中古で買おうと思うけどあるかな？  
大学生なのにバイトが出来ないのはキツイ  
感想をくれるともっと嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7189x/>

---

IS～インフィニットストラトス～黒騎士は織斑一夏

2011年10月20日01時04分発行